

平成20年度兵庫県立人と自然の博物館協議議事録

1 日時及び場所

- (1) 日時 平成21年2月19日(木) 午前10時から正午
- (2) 場所 兵庫県立人と自然の博物館 大セミナー室

2 出席者及び司会進行

○委員（敬称略、五十音順）

天川、岩木、楓、上甫木、貴多野、坂田、鈴木、竹内、辻本、端、山西（委員長）

○人と自然の博物館及び社会教育課

岩槻館長、中瀬副館長、坂本次長、江崎次長、野田課長(社会教育課)、西向館長補佐、高橋部長、服部部長、田原室長、平松課長、藤村課長、三枝室員、大橋指導主事(社会教育課)、客野室員、岡井主査、川東主査、

○司会：西向館長補佐

3 議事

○開会挨拶（岩槻）

今年度は当初から未曾有といわれる経済危機があり、新しい博物館構想の基本計画については予算措置にはいたらなかったが、ソフト展開という形でこのときに考えていたアイデアのいくつかが実施に移されている。また、博物館の新展開を始めて第二期となるが、ひとはくのは館外でも知られるようになってきている。日本の教育体系の中で博物館が果たすべき役割、という点について着実に実績を果たしてきているものと考えている。このようなことを見据えた上で、博物館に何が必要であるのか、率直なご意見をいただきたいと考えている。今後の活動に向けて、ご議論をよろしくお願いします。

○議事次第の紹介（西向館長補佐）

○出席者紹介（西向館長補佐）

○議事進行（以降、山西委員長による進行）

（1）報告事項

<博物館の活動について>（坂本次長）

館報2007を用いて各事項について説明する。沿革と機能、組織および職員数について掲載されている。前回とほぼかわりがないが、研究員については研究部門に属するだけでなく、館長辞令によりマーケティングおよびマネジメント部門、事業推進部門の業務も担当し、館員が一体となり業務を進めている。さらに、タスクフォース群を設けており9つのプロジェクトを円滑に推進するためにタスクフォースのチームを設置している。来年度の組織については、現在見直しを進めている。ひとはくトピックス、また、丹波市に恐竜ラボ山南ルームが開設されたが、昨年4月博物館においてもひとはく恐竜ラボが開設され、多くの来館者が化石のクリーニング作業を見学している。事業報告、中期目標、これは当

館の行動指針で、平成19年度の自己評価と20年度の取り組みの予定を項目ごとに整理している。中期目標の状況については、毎月館員が集まり担当者からの報告により、その進行管理を図っている。博物館活動、セミナーの一覧、企画展、学校団体の連続入館状況、過去5年間の学校の入館状況、一般団体の来館状況、共催および協力事業、サイエンスショー、フロアサービスの実績、外部資金の導入状況について館報に従って説明。県の財政状況が厳しい状況であるが、当館でもさまざまな創意工夫を行い博物館機能が十分発揮できるようにしている。また、ひとはく手帖2009では生涯学習を支援する団体や環境学習を支援する団体から広告協賛により作成している。

<「昆虫記」刊行100年記念日仏共同企画「フェアブルにまなぶ」展について> (高橋部長)

「フェアブルにまなぶ展」のひとはくにおける取組みについて説明する。平成20年9月20日から11月30日までの72日間の間、フェアブル昆虫記の最終刊の刊行100年を記念しフランスの自然史博物館と国内の5つの博物館が共同して行う巡回展にあわせ、ひとはくフェアブル大作戦を開催した。通常の博物館の観覧料は200円であるが、今回の特別観覧料として、大人600円、大学生、高校生450円、小・中学生300円と設定した。この企画の中心となる展示は、「フェアブルにまなぶ展」であり、北海道大学総合博物館、国立科学博物館、北九州市立いのちのたび博物館、滋賀県立琵琶湖博物館とひとはくが共同で実施し、ひとはくが最後の開催であった。この展示は、フェアブルの業績を紹介するとともに、その後昆虫学がどのように進展したのか紹介した。フランス自然史博物館の資料、国内博物館の館員が収集した資料などを用いた展示である。ホロンピアホールを会場にし、9月20日にオープンした。また、常設展示である兵庫の地域展を拡充させた。具体的には、兵庫のナチュラルリストと昆虫不思議ラボというコーナーを設け、トピック展示を追加した。昆虫不思議ラボというコーナーは本館の企画展示室の中に設置したもので、子どもが遊びながら昆虫の不思議を体感出来る装置などを設けた。さらに、新しい試みとして、ひょうごのフェアブル・未来のフェアブルという展示を行った。これは一般県民、児童生徒、地域研究員から展示物を公募し、出展者の人物像と顔写真と簡単なコメントを紹介しながら、自身の発見やこの夏に観察したものを実物標本や写真、絵を通して展示した。総作品点は328点集まった。実物展示が89点、ポスターは239点で、出展者の年齢は幼児から大人まで幅広いものであった。中心は小学生であったが、中学生や高校生も出展していた。また、出展者の居住地は兵庫県だけでなく、大阪、京都、鳥取、岡山、奈良県にわたり、県内では、三田、神戸を中心に、宝塚、川西、加東、西宮市などからも出展があった。出展者は会期中に何度か知り合いや家族を伴って会場を訪れていた。セミナー、イベントについては、新たな人と自然の博物館基本計画で示されたソフト先行事業の一環として演習プログラムなどを多数実施した。ギャラリートークは毎週土曜日に計11回実施し好評を博した。また、関連事業の一つの事業として、10月4日の土曜日に淡路夢舞台にて「自然の再生と共生国際フォーラム in 淡路夢舞台」と題し国際シンポジウムを実施し、参加者は500名を超えた。ピエール・マリー・ブランケ氏アベロン県副議長とジャスミ

ン・ママ氏マイクロポリス館長が訪れ、国際交流を実現した。そのほか、淡路の奇跡の星の植物館などと共催展示も実施し、新しい可能性を探ることができた。また、新しい広報システムの開発にも取り組み、①対象ごとの広報の最適化、②新規学校団体の誘致策としてフェアブルトーク、③既来館者へプログラム配布PR、④フェアブルポイントカードを作成、⑤オリジナルグッズを開発した。

この結果観覧者数は11月末まで36,654人、内有料入館者数は10,654人、学校団体は132校11,930人、総ビジター数は74,409人となった。これは昨年の9～11月の約1.2倍の数字である。また、新聞に掲載されることも多数あった。

議長：関連事業も多く大変だったと思う。去年の後半はフェアブル展一色だったと思う。

<生物多様性ひょうご戦略への取り組みについて>（服部部長）

生物多様性保全の流れは、まず1995年に生物多様性国家戦略の第一次版が提示された。2002年には第二次、2008年には第三次生物多様性国家戦略が提示され、昨年の6月には生物多様性基本法が策定された。これに伴い兵庫県でも戦略を策定する動きがでてきた。兵庫県では岩槻館長を中心に、生物多様性ひょうご戦略の委員長として現在策定中で、3月には完成の予定である。兵庫県は日本一ともいえる自然が10近くもある多様な県であり、レッドデータブックは国に次いで作成したという経緯もあり、出来るだけ早く生物多様性ひょうご戦略を策定することが目標であった。しかし、結果的に千葉県に先を越された。この戦略の特色の一つは、レッドデータブックの見直しを来年度から始めることである。さらに新たに生態系の保全に向けた生態系レッドデータブックを作成することである。また、他部局や市町にも働きかけ、詳細な計画を作成してもらうことを想定しており、そのための支援を積極的に行うことも一つの特徴である。さらに、アドバイザーの派遣と支援拠点をつくることを考えている。兵庫県は支援拠点の設置に関して予算が計上されなかったが、レッドデータブックの見直しについては来年度予算に計上されている。三田市は日本で初めてレッドデータブックの市町版を制作した市であるので、三田市においても市町版の初めての戦略をつくっていただきたいと考えている。また、生物多様性武庫川戦略とか、猪名川戦略などの地域版の戦略を作ることにより兵庫県の多様性保全を進めることも考えている。

<議論>

議長：ご意見をお願いします。

委員：館報2007の事業報告について、中期目標で設定されている目標と基準を見直すのか。

博物館：中期目標は現在第二期であり、第一期は平成14～18年の5年間としており、その結果を踏まえて現在の第二期の中期目標をとりまとめた。館報2007は暫定版として運用していたので、平成20年度には見直した経緯がある。基本的には5年に一度見直している。指標設定の基準の一つは実績である。新たな人と自然の博物館基本計画に関連する部分では高めの目標を設定している。

委員：毎月のチェックは大変ではないか。

博物館：全ての指標を毎月扱っているわけではなく、四半期に一度というものもあるが、普及教育に関する来館者数のようなものについては毎日の報告がありこれを月に一度まとめて担当の部署から報告している。これに館長からのコメントをつけている。これを月例報告会と呼んでいる。

委員：時間はどのくらいか。

博物館：時間は業務に差し支えないように30分としている。毎月第二金曜日に行っている。他館の人達に月例報告会のことを紹介すると、感心されることが多い。他館では、わずか30分であるが月に一度でも全館員が一同に会するという機会はほとんどない。館の現在進行中の状況を館員でチェックするという点については意義が大きく効果は大きいとみている。

委員：フェアブル作戦は成功したといえる。今まで、他館と協働でこのような大きなイベントを行った実績があるのか不明であるが、館としてこのイベントをどのように評価するのか、またどのような点を学んだのか。また、参加者数について、有料入館者の割合はひとはくは30%弱だが、他館は70%であり、他と比べて低いとその理由はなぜか。さらに総ビジター数が74,000人程度でそのうち観覧者が37,000人程度であることから考えると、イベントで30,000人近い入場者があることになるが、これは他館の状況と比べるとどのように評価できるのか。

博物館：観覧料は元々200円であったところ、これを600円とすることにより、どのくらいの来館者があるのか不安であったので、新たな人と自然の博物館基本計画でも謳っていたソフト事業を付加した。展示を見に来たときに、何かやっていて楽しいという雰囲気を作りたいかった。来館者は当初想定よりも多かったのが安心している。有料入館者数の数が少ないのは、学校団体が多いことが原因でもある。特に子ども向けの働きかけを行ったことによる理由である。ただ、有料入館者数は伸び悩んだものの平年に比べると多く、また観覧料収入も3倍に増えた。また、若い人が多く来てくれたことにも意義があり、これはひとはくの財産と考えている。北大では展示は無料である。また、国内最初の会場である理由から、新聞などで報道された機会が多かった。さらに北海道では大きなイベントがないこともあり多数の人があったと考える。他の会場に関しては、会期日数のことなども勘案すると、人と自然の博物館は展示だけでなくソフトもあることにより、相当数のビジター数にいたったと考える。他館の担当者からは、展示だけでは人は呼べないという意見もあった。

委員：入館者を実施日数で割ると、他館と変わらず500人程度である。イベント、セミナーを多くする力があつたことは意義がある。予算はどの程度であったか。

博物館：巡回展の展示の制作費用は総額で7000万で、これを展示面積に応じて按分し5館で分けている。ひとはくの負担は1/7程度であった。通常の特別展示で考えると7000万円では不十分であった。そこで予算を抑えるために造作にダンボールを用い

て節約を図った。出来上がりはきれいでまた丈夫でもあり、観覧者にも節約しているということで感心された。

委員：事業活動について、学校団体の入館状況や来館団体が把握されているのがすばらしい。対象別に有効な広報システムをとるのは正解である。これからは公立の施設でも顧客を囲い込まなければならない時代となってきた。対象別にデータを整理しているが、広報、すなわち宣伝や広告のツールをターゲットに向けて打つという、マーケティングコミュニケーション戦略は、他と比べて傑出していると考えているが、その基本的な考え方はどのようなものであるか。

博物館：前回、前々会の会でも委員から指摘があったように、顔が見える、セグメント化して強弱をつけるという考え方をもって進めているが、体制がまだ追いついていない面もある。しかし、個々の事業についてそのような考え方に基づき事業や広報を行っている。

委員：ひとはく新聞やセミナーガイドを的確に送付しているのか。そうすれば集客に対し苦労しないのではないかと考えるが、これはこれからの課題であろう。

委員：奇跡の星の植物館でコラボ展を行い、植物館でも入場者が増加した。他館と人と自然の博物館がネットワークをすることによりさらに内容が高まることが多いと考える。協力することにより内容を広めることが可能で、広報を他館と協力して行うことなども考えられる。また、特別なときだけでもセット券をつくる等実施することも可能では。確実な集客に繋がるのではないか。

博物館：他館との連携についてはフェアブル展を契機に始めた。県立美術館との協働もこれまではなかった。それぞれが持っていないものをチラシに載せたり、展示することによりお客さんの層が広がったことを実感している。今後も多方面とコラボすることが重要である。前売り券の設置は困難であるので、チラシに割引券を印刷し配布したが、これを持って来たお客さんも数多くあり、効果があった。

委員：割引券をつけるとチラシが捨てられないのでよい。

委員：生涯学習の支援に関する評価について、活動数や登録数などの生のデータしかない。これは重要な指標ではあるが、生涯学習の支援の質を担保するための指標はどうするのか。何らかの定性的な指標を設定して、年に一度でもその達成状況を確認するという事にまで踏み込んでほしい。登録数や活動数だけでなく、その中身についても議論が可能であり検討して欲しい。また、生物多様性は重要なテーマであるが、一般の県民にとってわかりにくく、かかわりを感じにくいので、それが重要であり私たちの暮らしにとっていかに重要なものであるのかということの普及啓発も大切では。また、環境学習を行う場合、生物とのふれあいが対象の場合が多いと思うが、生物多様性という概念が我々の生活にどのような意味を持っているのかについての理解が必要である。

委員：生物多様性に配慮した商品を選択するとあるが、これはどういうことか。

博物館：事業の質に関する部分の評価について、本来は満足度などのアウトカムがはつき

りとした指標が望ましいと考える。過去セミナーの満足度調査などを試行したところ、すべてのセミナーで高い数値が得られている。質を把握するための指標については模索しているところである。何もないよりは少なくとも数字でアウトプットが把握した方がよいと考える。実際の事業報告の中では、公開されていないものも含めて中期目標以外の指標も掲載されている。今後は質に関する指標も検討してゆきたいと考えている。良い指標があれば次回にでも報告する。

委員：満足度調査をすると80%程度の人は満足というのはどこの施設でもある。リピートがあるか、再入館、最利用があるかどうかということのポイントで、それを調べる必要がある。個別に顧客を把握する必要がある。

博物館：観覧者については課題として認識しているので今後検討したい。セミナーについてはセミナー倶楽部あり、リピーターの数などを詳細に把握している。多い人では年間17回参加しているという人もあり、ファンが固定化している。来館者についても今後方法を考える。

委員：どういう担い手がどのように養成・活動しているのかということについてみる必要があるが、それはアンケートで把握で把握出来ない。どういう観点から活動を評価しているのかという館の指標をもつ必要がある。

博物館：担い手として、館の事業パートナーを育成することがポリシーである。ここで掲載している指標は地域研究員という個人をパートナーとして認証する仕組みである。また、館には連携活動グループという制度があり、登録してもらいその活動を把握している。これ以外の形でも様々な担い手の養成を行っている。これをどのような形で把握していくことが今後の課題である。

博物館：担い手の養成については、共生の広場という事業がある。これは地域研究員や連携活動グループが調べた発見・内容を発表する場であり、担い手養成の成果を発表している。共生の広場での発表参加者からの定量的な評価もらえれば、担い手養成について評価の一つとなるのではと考える。

議長：生物多様性ひょうご戦略について博物館が関わるのはすばらしい。ただ、県との関係はどうなっているのか。また、これをわかりやすいものにするためにどのような取り組みを行っているのか。さらに、表現の仕方として、生物多様性に配慮した商品を選択するとあるがこれは何か。

博物館：この戦略を担当しているのが県の自然保全課であり、それを援助するという形で博物館が関わっている。また、生物多様性に関するセミナーとして岩槻館長をはじめ市民に理解してもらえるものを来年度実施する予定にしている。また、表現に関して、生物多様性に配慮した商品の選択の一例をあげると、たとえばミカンにカイガラムシがついている場合、これを除去するために農薬をすることになるが、味が変わらないのであれば、カイガラムシのついていない農薬を使用していないものを選ぶということである。この場合農薬を使用しないということで生物多様性にとってもプラスになる。

博物館：生物多様性のPRについては兵庫県だけでなく、国としても重要な課題として認識しており、予算をかけて取り組んでいる。博物館の中でも多くのセミナーを行っている。また、昨年、博物館が共同で主催したシンポジウムが3つあり、一つはフェアブル展である。この他に環境省の里山イニシアティブと合同で行った里山に関するシンポと、NGOと共催した生物多様性に関するシンポがあり、いずれも大きな会場が満員なるほどの参加者があり、一般向きのイベントも実施している。また、私自身も10回の生物多様性に関するセミナーを行っており、その内容が書籍になるように準備している。様々な階層に対しての宣伝活動を積極的に行うことが必要不可欠である。また、戦略がでること自体がこれを理解する強い氣勢になるし、また、生物多様性基本法では、兵庫県だけでなく市町村においても取り組みが広がることが書かれており、取り組みの広がりが重要である。また、商品としての認証とは、森林認証制度や海産物のごく限られたものについてはエコ商品として認められているものがある。この考え方を広げ一般の国民全体がこれに配慮する意識の涵養を意味しており、サンプルとして認証制度に認められたものをさらに宣伝する必要があると考えているが現状ではまだ不十分である。

委員：行動計画の中で、生物多様性アドバイザーが取り上げられているが、この養成は難しいのではないかと。また、地球温暖化への対応と記されているが、これも難しい課題である。これらのことは、行動計画の中で具体的にどのように取り組むのか。

博物館：アドバイザー設置に当たり、その人材は少ない。人材の養成を含めて取り組む必要があるが、博物館がその中心となる。我々が積極的にアドバイザーとなり各市町等の生物多様性兵庫戦略を進めたい。また、地球温暖化による生態系への影響については、六甲山は夏緑林帯とあって、冷温帯が残っている場所であり、このような場所で生態系がどのように動いているのか調査している。現在ブナの実生体は殆どなく、老木ばかりとなっており、逆に六甲山の山頂付近で照葉樹が増えていることが判明している。これらのことは温暖化が進んでいることをおそらく日本で初めて陸上生態系から捉えたものとする。

博物館：ここに取り上げられていることは生物多様性国家戦略に則って書かれている表現であり国全体で取り組むことでもある。兵庫県は温暖化に関することについても先進的で様々な事例がある。兵庫県はこれまでの実績を踏まえてこれを進めていくという意図で記載している。

議長：三田市は先進的であるとのことだが、これに関する取り組みはどうか。

委員：今の経済状況を鑑みると、財政問題が優先であり、市民のニーズを踏まえると予算は後回しとなる。人と自然の博物館は知的集団であり、社会に一定の貢献をし、各市町もそれをある程度支援をするという形での管理運営が考える。市町としても必要なことであるが、難しい側面もある。

委員：博物館は不便なところにあり、現在居住している不便な場所から不便な場所に行くのは難しい。博物館に行ったことのないのという人もいる。月に一度でもよいので、

博物館が県内を巡回するバスを走らせることにより入館者も増えるのではないか。フェアブル展などでは、子供会などがまねて学べるような仕組みがあってもよいのではないか。また、小さい子供づれの親子が来館した場合、子供がミツバチや蟻の格好ができるイベントがあれば、子供も喜ぶのではないかと考える。また、子供をターゲットにしているというが、展示の内容が難しいと考える。

博物館：バスの件については一度予算要求をし、措置されなかった経緯がある。また館の現在の展示は既に古いものもあり、予算がつけばご指摘のように変えようと考えている。親子向けの取組みについては、フロントスタッフが着ぐるみを設置していたこともある。博物館としてもアンダーファイブ（5才以下）が物心ついたときから環境教育を始めるということが重要と考えている。兵庫県でも保育所、幼稚園や小学校3年、5年生、中学生のトライやるの連続的な取組みを考えている。その中で幼小連携も議論されており、ひとはくが果たすべき役割についても考えている。

委員：一般の方も気楽に質問ができるような仕組みがあるとわかりやすい。初めて来た時に若い研究員が歩いていて、気軽に質問に答えてくれたことが印象に残っている。好感を持っている。そのようなことも進めてほしい。

委員：恐竜の発掘にも苦労話があったと思う。他館で苦労話を展示してあり、来館者は熱心に読んでいる。そのようなことが関心の入り口になる場合がある。読み物のようにして写真を入れながらつづきで読んでいけるようなものを毎回入れ込んではどうか。

委員：財政状況が厳しいということで基本計画の実施も難しいとのことであるが、たとえばフェアブル展における演示プログラムについての構成などの評価をきちんと蓄えておき、予算措置された時には、すぐに動き出せるようにしておくことが重要である。

（2）協議事項

<恐竜化石等発掘状況報告及び今後方針について>（三枝研究員）

本日も午前中から発掘をしている。あと一週間から10日程度かかると見込まれる。第三次発掘において胴体の肋骨の一部がいくつか発掘されている。化石が2850点で、恐竜の歯は約60数点程度発掘された。他県の例と比べると多い。これにより新しい局面がみえてくると考える。第三次発掘について、工事は年末から始まり、発掘は1月9日から始まった。2月下旬には発掘する予定で、3月には整地が終了する予定である。発掘されているものの殆どは破片であるが、イワノドン類が多いが別種の草食性の生物の歯が発見された。これは参加者の技術が上がっている面も影響している。1月29日には肋骨の破片群が連なって発掘された。また、足や首の部分の発掘が期待されたが、第三次発掘の範囲には脚部や首部が無かった。イワノドン類の2cm程度の歯が見つかったのが成果である。歯の使用状態、形成段階がよくわかる化石で、学術的には興味深い。歯の深化を考える上で重要である。今後は、第四次発掘の状況を見て、第五次以降の計画について検討する。篠山でも別の化石の発見があった。ほ乳類の祖先を知る上で重要な発見であるが、同

時に恐竜やトカゲの化石も発見された。今後、整理、片付け、論文執筆などを行う。今後の計画を慎重に講ずる必要がある。

<議論>

委員：淡路でも2回恐竜の化石が発掘されているようであるが住民は知らない。例えば、兵庫県全体で、発見された場所を示すような展示があってもよいのではないか。

博物館：淡路をはじめ県内各地で化石が発掘されている。これらをきちんとフォローして、県内各地で発掘されていることを知らすことができるような展示やパンフレットを来年度にでも考えていきたい。また、3階の展示も恐竜を中心にしており、いずれ淡路などで発掘されたものや三田で発掘された化石も含めて兵庫県全体の化石がわかるような展示をしていきたいと考える。

博物館：地層をみると恐竜化石が出そうなところは県内に広くあり、各地で恐竜化石を発見しようというイベントをしても良いと考える。篠山や丹波で2匹目を見つけようというイベントを実施し、その流れで各地において化石を探しても面白い。

委員：フェアブルのイベントでは館員が楽しんでイベントをしていたと思う。なにをするにも、やり手が楽しまないと見る側も楽しめないということは大前提ではあるが、自分だけが楽しいことが多い。相手のことを思わない楽しさで伝えようとしていることがある。見せたい人を呼びたいというのでもなく、博物館でアカデミックに学びたいとか、楽しみたいと思わせるものが望まれる。また、段ボールがことの他好評であったとのことであるが、震災時にはダンボールで家具が作られたことがあった。14年立ってもまだ壊れずに使われているものもあるとのことである。ある建築家が紙で住宅を作ったり、教会を作ったことがあったが、この一部が昨年台湾に移設されて、教会や集会所として使用されている。人間の都合だけで物事が進まないということを理解することも必要である。

博物館：適材適所が必要であるというのは指摘の通り、タレント性をタレントとして発揮出来るようにする必要があり、現に行動している者もいる。

議長：今回の意見が、今後の運営に生かされることを期待している。ご協力ありがとうございました。

○閉会の挨拶（岩槻館長）

短い時間でしたが、ご意見ありがとうございました。真摯に受け止め、出来るだけご意見が生かせるように努力したい。これからも博物館が良くなるよう率直な意見を賜るようお願いする。ありがとうございました。